



たかが名前、されど名前

すぎもと
杉本

よしお
良夫

●豪州ラトロープ大学名誉教授・社会学

私たちの住んでいる地域には、星座や太陽系にまつわる通りが集まっている。Pavo（くじゃく座）通り、Aquila（わし座）通り、Columba（はと座）通りなどなど。この付近の都市計画にあたった人たちが意図して名付けたのだろう。その中に Corona Street という名の通りがある。文字通り「コロナ通り」だ。コロナとは太陽の大気を取り巻く光の部分のことだから、宇宙の名がいったいのコミュニティの通り名にふさわしい。わが家から半キロほどのところにあり、毎朝散歩の際に通るのだが、時期が時期だけに、通りの看板は否が応でも目に飛び込んでくる。もともと、ここ2年余りのコロナ禍で、少しは話題になるのかと思ったが、そうでもない。コロナ通りの住民たちも、たかが通りの名前ぐらいで騒ぎ立てず、落ち着いたものだ。

住所名など大した問題ではないかもしれないが、人名となると少し事情が違う。世の中には変わった名字があるもので、例えば Coffin という姓の人がいる。訳せば「棺桶さん」ということになる。ネットで調べてみると、オーストラリア在住で電話番号を公開している人たちの中に少なくとも7人いる。全人口の中には、もっと存在することだろう。他にも Ghost（お化け）という名字の人が2人いた。

さて、自分の姓名が気に入らず、変更したいと思ったら、オーストラリアではどうするか。各州

に「出生・死亡・結婚登録所」があって、そこに申し出て、必要用紙に記入して提出するだけだ。裁判所に訴えて出ることなどは必要ない。こうしたことは個人の選択の問題で、許可制ではなく届出制であることがポイントだ。ただし、名字は無制限には変えられない。私たちの住むビクトリア州では、変更は最高1年に1回に限り、人生のうち3回以上はだめだという規定がある。

そんな具合だから、夫婦別姓のカップルなど全然珍しくない。子どもが生まれると、夫婦が違う名字を使っている場合、子どもの名字をどうするかが問題になる。父親か母親のどちらかに統一すると話は簡単だが、そうすると不平等だという考え方もありうる。というわけで、男の子はお父さんの姓、女の子はお母さんの姓を選んでいるケースもある。いずれにしても、一家の中に違った姓が混在している家庭は珍しくない。

もっと工夫して、子どもの姓は夫婦の名字を組み合わせて、ハイフンで結ぶという手もある。例えば、Smith という男性と Tanaka という女性の間生まれた子どもなら、Tanaka-Smith あるいは Smith-Tanaka という名字を持つわけだ。こうした子どもはハイフン・キッズと呼ばれ、時代の一側面を反映している。ハイフン・キッズ同士が結婚すれば、名字が長すぎることも起こるのではないかと思ったりするが、野暮な懸念かもしれない。



筆者の住む地域にある「コロナ通り」の看板

こんな新聞記事を目にしたこともある。姓がビアという女性の話である。ビアは日本語で言えば「ビール」なのだが、彼女はプライス氏と結婚した。夫婦は子どもにはふたりの姓を残したいと思い、子どもはビア-プライスというハイフン・キッズとなった。「ビール代」という意味である。親子とも、それで満足しているということだ。

もともと、友人や同僚、隣近所の人たちとは名前で呼び合う慣習だから、相手の名字を知らないで付き合っていることもよくある。姓の方は重要度が低いので、どんな名字でも大した騒ぎにならないという事情もある。私も左右前後に住んでいる人たちの名字を知らない。

公的な身元証明書としては、出生証明書、旅券、自動車免許証などがあるが、どれも個人が単位になって発行されている。世帯が単位ではなく、世帯主というタイトルも存在しない。

そもそも、出生書そのものが、赤ん坊個人の単位で発行される。まず生まれた子どもの姓名が記入してあり、出所日と出生地、母親の姓名と彼女自身の誕生日が書き込まれる。事情に応じて、父親の姓名と誕生日は記入してもしなくてもよい。兄妹など他の家族の名前は分からない。出生書を発行してもらうには、申請者の本人証明が必要だが、それには旅券、自動車免許などが使われる。すべてが個人単位で進む。

こういうことが気楽に行えるのは、オーストラ

リアには戸籍制度がないこととも関係している。国があると戸籍があるものだと思っていたが、日本など東アジアの一部の国を除いて、世帯を単位とした戸籍制度に当たるものは存在しない。戸籍がないから、戸籍筆頭者という範疇もないわけである。世帯名を書いた表札というものも見かけない。

名前といえば、日本人の場合、姓名の順番をどうするかという問題もある。日本人は日本語の習慣に従って、姓・名の順番にすべきだという考え方が日本の英語教育者の中で強くなってきているからだ。Yoshio Sugimoto ではなく、Sugimoto Yoshio と名のるべきだというわけである。文化相対主義の立場からみると、この主張は一見説得力に富む。

しかし、実際に英語圏の社会で暮らしてみると、ことは簡単ではない。Sugimoto Yoshio を日常で使うと、Yoshio が姓だと思われて、混乱が起こる。出版物で「姓・名」の順で発表すると「Yoshio によると」というふうに引用されることも少なくない。日本では姓が先行することを、日本の外に住む人たち全員が知っているべきだという考えは、エリート主義だという面もあるのだ。

たかが名前、されど名前。その使い方には、いろんな文化的要素がまつわりついていて、話は一筋縄ではいかない。